昔の市原海岸

安原修次　編

市原市立図書館
301177705

編者略歴

安原修次

昭和11年(1936年)群馬県中之条で出生
千葉大学教育学部修了後
県内印旛郡、習志野市、船橋市の小学校に勤務
昭和59年(1984年)48才の時退職し、花の写真家になる
以後32年間、全国各地の花を写し、写真集を32冊出版

〈おもな花の写真集〉

- 千葉県野の花(自費出版)
- 札幌の花(鬼灯書籍)
- 北九州の花(鬼灯書籍)
- ふなばし野の花(鬼灯書籍)
- 花ひらく中之条(鬼灯書籍)
- 花咲く京都(鬼灯書籍)

昔の市原海岸
発行　2017年2月6日

編者　安原修次
〒274-0805　千葉県船橋市二和東6-14-1-107
☎090-4010-1804

製作　共育舎
〒065-0018　札幌市東区北18条東16丁目2-10
☎011-780-7112　FAX 011-780-7113

昔の市原海岸

八幡、五井、姉崎、青柳、椎津の海岸は
干潮になると一キロ先まで干潟になり
干潮時、魚とりなど、
子ども達の楽しい遊び場だった。
おとなにとっては大事な仕事場。
景色も素晴らしく、
遠くにはくっきり富士山が見えた。

昭和三十五年に始った埋立てで
あたりは一変、
京葉工業地帯になった。
貝や海苔とりなど漁業で生活できなくなり、
工場に勤めても、
慣れない仕事で大変だった。
埋立てから五十年過ぎても
昔の海のことは忘れない。

（青柳　加藤吉啓）

市原市の海は埋立て前、八幡、君塚、五井、青柳、今津、姉崎の六つの漁業組合から成っていました。特に青柳浦は、魚貝類はもとより、明治三十三年より海苔養殖が始まり、明治大正時代には、東京へ魚貝類を運ぶ船で賑わっていた。なかでもバカ貝は、青柳の人が東京へ運んだところから、アオヤギ貝という名前になったそうです。

私の中学時代、八幡幼稚園が建っていた。校舎の裏の木のすき間から、潮の満ちてくるのが窓辺に見えた。放課後みよにつないである海苔とりの船で、沖までやつって行ったこともある。

海の家が海岸沿いに、五、六軒並んでいた。東京あたりから沢山の潮干狩り客が来て、たいそう賑わった。その頃秩父宮紀殿下もお見えになったことが、強く印象に残っている。

絶景の海

（古市場　大塚良雄）

埋立てられる前の透明な空気で見た、夏の炎のような落日。冬の海に浮ぶ真白き富士、黒々と連なる箱根、丹沢の山塊、そして東京の背後に秩父が見えた。

沖合から見返せば房州の山々、裏にかろうじて太平洋を秘める台地は低く長く筑波に及ぶ。

その景観は海あったればこその感である。

沖合に白帆

（八幡　野口千代）

夕方になると波が静かで、遠くの沖合の方で白帆があちこちに浮かぶ。地平線のかなた夕日の沈むのを見ると、何とも言えませんでした。

風のある時は沖の方がゴーゴーと鳴り、冷たい風が

肌を刺し、えりまきで顔をかくしておりました。そういう時は、特に富士山がはっきりと西の方に見えるのです。町の人々は富士山が見えると、今日は風だとすぐわかるものでした。あの頃がとてもなつかしい。

夏の椎津の海

（廣部康昭）

今でも椎津には〝別荘下〟というバス停がありますが、別荘を建てて住んでみたいほど美しい自然のままの海でした。

干潮で水のなくなった岸辺の海には、数えきれないほどの「体操ガニ」が「イッチニ、イッチニ」と両手を上げたり下げたりしており、側を通ると一斉に小さな穴に入ってしまう。しばらくすると、また「イッチニ、イッチニ」と体操を始める楽しい光景が見られました。

沖には、高さ十五メートル位の鉄の棒が二本建っていました。地元の人達は「軍艦棒」と言っており、昔軍艦が通る時、潮の満干によって海の深さがわからないので、軍艦棒がどれ位出ているかで判断したのだそうです。

干潮の時には一キロ位沖まで水がなくなることもあり、海の中はグラウンドに早変わりする。子ども達はそこで野球をしたり相撲をとったりしてた。上げ潮になるとグラウンドがプールに変わり、遊びも水泳に変ります。泳ぎもただ泳ぐのではなく、もぐり競争（貝が何個とれるかとか、投げた貝を誰が取るかなど）や背中に人を乗せて泳いだり、自分達で楽しい方法を考え、暗くなるまで海で遊んだものです。

魚や貝も沢山とれました。魚はウナギ、アナゴ、アイナメ、カレイ、ギンポウ、ハゼ、エビ、カニ、ナマコ、まだまだ沢山ありますが、こういうものは足で踏んだり、カニの穴にカニといっしょに入っていたり、折れた竹ぐいに入っていたりして子どもにも取ることができました。

昔の千種海岸

（白塚　中村満之）

昔の五万分の一の地図と現在の五万分の一の地図を見比べると、自然な曲線をなす海岸線を幾何学的な直線で区切られた海岸線を見ることができます。

二十数年前、私達の住む土地名が、市原郡千種村であった。それが埋立地に工場群が並んでいる今、地名が変って市原市になった。しかし千種海岸という名称は残っています。

以前産業道路、今の国道十六号線、実はこの道路は完全に元の海の上にできているわけです。ではこの道路のどこからどこまでが千種の海であったのか。バスの停留所でみると、日本ソーダ前の五井南海岸という停留所から南西に行って、出光産業の正面前の近くまでであると思います。

かつて海岸の漁業で生計を立てていた人々の海に埋立地が出来て、大、中、小併せるとかなりの数の工場とその下請けの会社ができました。元の海を思い出すには余りにも変わってしまいちょっと想像しにくくなった。松ヶ島の浦から埋立地と防波堤の間に水路ができています。この水路こそ、昔の波打ちぎわだったのです。それも外房のように大きな波が寄せたり返したりするものではなく、波の小さい遠浅の海と陸との境に過ぎなかった。当時は立派な堤防がなく、陸から海へ向って自然に勾配がついていて、気軽に水に入ることができた。そんな昔の千種海岸を思うと、とても懐かしくなります。

今潮干狩のできる場所といえば、近い所で木更津まで行かなければなりません。もちろんそこは小さい貝を播いて育てたもの。だから金を払って決った量のものしか取ることはできない。目方が超過した分については、その分余計に金を払わなくてはいけない仕組みになっています。だから今は潮干狩に出かけてもリヤカーに積むほど取ったら、大変なことになります。

昔私達が何の妨げもなく自然の海で自由に遊べた時代が本当に懐かしく思われるのも、この様な場所と昔の海の遊びとを比較してみるからです。

夏休みは毎日海水浴

（姉崎　相川庄亮）

現在は埋立てで海岸が家から何キロも先の方に入ってしまったが、昔は家から四百メートル位で海まで行けました。泳ぎに行く時は海パンをはいて、はだしで海に行ったものです。夏休みには毎日必ず日課のようにして海に行きました。

遠浅の海のため、時間によってはすぐ岸の近くで泳げたり、二キロ位歩いて胸のあたりまで水のある所に行かなくては泳げない時もありました。水は今と違ってとてもきれいで、砂が一つぶずつ手にとるように見え、水中眼鏡を使って泳ぐとすばらしい眺めでした。

波のない海で泳ぐのに慣れたため、今でも外房の波のある海では泳ぎずらいです。海から帰って日なた水をあびると、疲れてぐっすりと夕方まで眠ってしまいます。日なた水とは、泳ぎに行く前に日のあたる所にたらいに水を入れておくと、帰ってくる頃にはぬるま湯になっている水のことです。

舟から飛込み泳いだ

（姉崎町　田中義男）

真夏になると海水浴客も多くなる。外房の海と違って海水は冷たくはなく、大潮の午後二時～五時の満潮で海岸線に到着するぐらいの海水は熱いぐらいになる。子どもが泳ぐには危険ではないので、東京方面のお客が多かった。昔は夏休みに入ると、期間中に全校生徒で二～三回ぐらい毎年泳いだ記憶もあります。それに六年生の時、男生徒だけで舟で千メートルぐらいの沖合に出て、舟から海に飛込み岸まで泳いだ記憶もあります。この時泳ぎきったのは四十八名中三名だけだったけどけっこう昔の子どもは泳げました。

なつかしい海

（八幡　中島忠雄）

中学時代、全校生徒が教材やクラブ活動の資金を集めるために、漁師たちが取り残したシオフキを皆で拾い集めた。十八キロ（一斗）を五円で大船に売った。みんなで協力しあってお金を得るという貴重な体験をしたことが、良い勉強になりました。

その時分はプールがなかったので、海で泳いだり舟で友達と競争したりして遊んだ。波の静かな海は楽しかったけれど、風が出たり早手（雨）が来て波が荒れだすと恐ろしい海に変化します。自然の楽しさと恐ろしさを身をもって体験した。

海水浴の観光バス

（八幡　国吉）

今から二十五年以上も前になりますが、八幡は潮のにおいがプンプンする場所でした。春になると潮干狩、夏には海水浴の観光バスで、生徒が体育をおもいきりできないほどでした。八幡中のグラウンドに駐車するのです。それはそれは大変な人でした。

海水はとてもきれいに澄んでいて、大人の首の深さでも海底にカニや藻がはっきり見えました。それはそれは今の時代、水中カメラで撮られたテレビ番組に出てくるようなすばらしさでした。

海岸の観光バス（昭和30年頃）潮干狩、賃立て遊びで賑わう
飯香岡のグラウンドは多くの観光バスの駐車場となった。

にぎわう海岸

（八幡　永野達雄）

八幡町は市原郡の中心で、警察署、地方事務所、公民館、法務局などが八幡宮の近くにありました。今でも想い出しますが、警察署の前の池に大きな鯉がたくさんいて、よく学校の帰りに道草をしたものです。

昭和二十八年頃になると、潮干狩が盛んで、学校でもよく

「今日はバスが何台来ているか」

と友達と数えた遠い過去を想い出します。確か最高で九十台位の観光バスが、今の運動公園で数えた記憶があります。

そして日本一の美しい富士山を見つめながら勉強ができた素晴しい環境の良さは、現在の子ども達には想像もつかないと思います。

五大力船

（八幡　松本友蔵）

旧八幡地区としては県内でも有数の米穀の集散地であったため、町の中には米穀問屋も沢山あり、五大力船（帆かけ船）で海上輸送で江戸へ送っていた。帰りはこちらで必要な肥料、外米、大豆、塩、雑貨日用品などを積んで帰ったので八幡港は賑わっていた。

その五大力船も大正年間頃迄で、鉄道が通り自動車が発達したのでしぜんに姿を消した。

大正三年頃から海苔の養殖が始まり、同年業者は三戸だったが、翌大正四年には八十戸位に増えて、増加の一途をたどった。

その後昭和になって東京の大森あたりの業者が八幡浦へ来て、種付けの仕方を教えた。埋立てが始まるまでは数百戸の漁民が養殖をしていた。

埋立てまえの海

（姉崎町　田中義男）

現在の産業道路に添って、丘側に川のような掘割があります。これが埋立てまえの海岸線でいわゆる波打際である。そこから沖に向って八〇〇～一〇〇〇メートルぐらい干満の際に干潟のできる海でした。

東京湾の干満の差は約二メートルあり、海岸の堤防に立ち沖を見れば、稚津の沖合に通称軍艦棒といわれる高さ約二十メートルぐらいの支柱が二本立てられてあり、軍艦棒といわれるわけは栖葉の沖にも同じ物が二本立てられてあり、昔東京湾にて軍艦の速力を計るために立てられたとの事。その支柱のあった位置は東京電力の建てられてある場所ぐらいです。又現在色々な化学工場が建てられている場所は海苔の竹柵が立ち並び、干潮になると海苔網が張り巡らされ、付着した海苔が伸び海一面が黒く眺められた所です。

その辺から丘側を眺めると町は一望、千葉方面は川崎製鉄の煙が見え、木更津方面を見れば、遠く鋸山も眺められました。又海岸線の堤防に立てば、西側に富士山箱根山とも見え、特に秋の入日の際の箱根山に沈む太陽は美しい。又北西には遠く日光の男体山も見え、北には筑波山がいつも黒く眺めることができました。

海とは一般的に大潮の干潮時が一番大であると考えられておりますが、実際は時期によって違ってくるのです。一月から二月頃にかけては夕方の干潮になる小潮の方が潮の引くのが大であり、三月から六月頃になって大潮が一番干潟ができます。この頃が特に潮干狩が盛んになります。

旧三月三日は江戸まで足駄を履いて渡れるというくらい、一年を通し干満の差が多くなります。六月中旬より九月頃までは大潮の前の小潮、いわゆる朝潮と称する夜明と同時の干潮の方が干潟が出ております。十月より十二月頃にかけては、日中は海岸線より百メートルぐらいの干潟しかなく、そのかわり夜はものすごく干潟が出ております。

なおちょっと余談ですけど、東京湾では四キロ以上の沖合に舟で出ますと、海水の流れ方は岸から沖ではなくいつも千葉方面より木更津方面に流れており、その流れ方が変わると翌日は天気が変り雨か風になります。一般に漁師は天気の見方が上手といわれていますが、このような海水の流れと夜明けの空を眺めて一日の天気の判断をします。

子ども達との海

（椎津　石井光子）

「先生、蟹はね、こんな穴の中にいるんだよ」
「うん、見ててごらん。いいかい、ほらっ」
腕に手拭いを巻きつけて、三年生の小さな子ども達では肩までもぐるような深さから蟹をつかみ出してくる。一つの穴には一匹、バケツがみるみるうちにいっぱいになる。元気のいい男の子達の活躍の場所が海なのです。
小さい時から海で過ごした子ども達は、実にじょうずでした。女の子はハマグリをとったりアサリをとったりする。
「先生、家の人がね、目があるからハマグリやアサリのいる所はちゃんとわかるんだって」
と言いながらハマグリをとっている。どこをひっかいても、砂の中から大きなハマグリがどんどん出てくる。
「重くて持てなくなるから、もう終わりにしない」
「うん、そうだね、先生」
「このハマグリどうしよう」
「家にはみんないっぱいあるから、先生持っていって食べれば」
こんなわけで学校へ帰ってから、小使いさんに蟹もハマグリも煮てもらい、取りたての新鮮な海の味を味わったものです。先生方や小使いさんで。又給食ではなくその頃はお弁当でしたから、子ども達の家からみそで味付けをしたカニのおかずが届いたりしました。冬ともなればこれも磯の香りが鼻をつく新海苔が百枚二百枚と届けられたものでした。
赤白にぬり分けられたフレアスタックの煙突を見る度に、今はそんな理科の時間を子ども達とは絶対に持てない、昭和三十年頃の海を思い出します。

（五所　石川ひろみ）

今は海も埋立てられ、すっかり変わってしまいましたが、昭和二十七年ごろまでは遠浅でした。干潮には約二千メートルの先まで歩いて行くから、いろんな貝が沢山とれた。
夏は海水浴でにぎわいました。十月ごろから翌年の三月まで、海苔の養殖。味の良い海苔がとれました。

海の思い出

（今津朝山　鈴木茂雄）

海を埋立てる前をふりかえってみると、澄みきった空、遠浅の青い海、みよ（川口）にはのり取り船がきれいに並び、とてものどかな生活でした。
冬から春にかけては、アサリ、ハマグリ、アオヤギ、カキなどの貝、イワシ、スミイカ、イナ、カレイ、イナメなども捕れました。
ところどころに簀立てがあり、東京方面から家族連れで遊びに来る。生きのいい魚や貝取り、海水浴にと一日楽しく過ごして帰ったものです。
夏から秋にかけては、カニ、シャコ、ハゼ、エビ、それからのりの網すき、九月に入るとヒビ立（竹杭）を小さな舟を二隻つないで、その上に竹杭を積み、二千メートル位の沖にこぎ出し、水中ポンプで穴をあける。そこに杭を立て、九月下旬から十月上旬にかけて網を張る。十一月上旬には黒々とした柔らかい新のりが採れる。最盛期は十一月下旬から一月下旬位まで。
だが海には氷が張ってとても寒い。手に感覚がなくなり、小舟の角に手をたたきつけながらのり取りが始まる。風が出ると大変なのでひきあげる。
家にいる主婦、祖母達が機械でのりを切る。竹の簀にのりを付け、そのあと乾燥させる。
二月下旬頃より色が青みがかり、葉も硬くなり味

も落ちる。
このように一年中自然に親しみながら生活したのです。

心のふる里

（八幡　内村雅江）

「お母さんの子どもの頃は、アサリなど豊富にあり、砂を掘るといくらでもとれたものよ」
と話すと、子ども達は
「一度でもいいから、そんな海で貝をとってみたかったね」
と目を輝かせて聞いています。
現在八幡運動公園になり、工場が建ち並んでいる所はみんな海だったのですから。夏には潮干狩のお客も多く、バスで乗りつけたりしてとてもにぎやかでした。
いつもこの海で過ごした夏を心の中に、一つのふる里の思い出として残っています。

姉崎の海

（姉崎　梅沢繁子）

私が小学校の頃、古敷谷、高滝の学校の生徒達は、五井や姉崎の海に潮干狩に来ました。遠浅できれいな海。それから昭和三十年頃姉崎に嫁に来ましたが、昔のままで春になると近所の人達でさそいあって貝取りなどをした。各家庭の軒先にはアサリのむきみがきれいに干してあり、酒のつまみなどによく使いました。
夏になると、東京や各地域から海水浴や簀立で海はとてもにぎやかでした。カレイ、アジなどがたくさんとれました。子どもの手を引いて貝を取りに行くと、モクの中にイシガニ、クルマエビなども多く取れ、食べるものには困りませんでした。
寒くなると海苔の杭が立てられ、浅草海苔といって真黒な海苔が取れ、田んぼには海苔の干場ができて海辺という感じでした。

姉崎の海は遠浅で、泳ぐ時には沖の方まで歩いて、水が胸位の所で海水浴をしました。藻がある所はさけて、砂地の所で海にもぐる。目をあけると、貝がきれいに見えました。
上げ潮になると水がどんどん増えてきて、こわい思いもしました。
堤防が長く続いていて、海の反対方向には田んぼがある。水着で歩いて行って裏の木戸で水を体にかけて海水を落としてからスイカを食べた。それから昼寝をしました。
七月二十日のお祭りには、おみこしが海の中に入っていく。そして鳥居の中をくぐって勇ましく海からあがってくるのです。

（姉崎　来須可し久）

私の家は昔から漁業を主として暮してきましたが、昭和三十五年（１９６０年）海が埋立てられた。大きな工事が続々おこなわれ、今では昔の風景は全然見られなくなりました。
埋立てられる前の海は、春になると貝を取ったり、カニを取ったり、ウナギ筒をはたきに行ったりして楽しい日々でした。夏になるとカンテラを下げてエビを取ったりして、新鮮な魚が沢山食べられました。

（今津　石井すみゑ）

海には境界もなく、姉崎漁業組合という組合があった。アサリ、ハマグリの種も海で育てていくのです。
夜になると、その船には藻がたくさん積んであります。藻は一つの道具となります。番人が船に近づくと、藻を海に捨てて逃げるわけです。その藻は船のスクリュウにからみつき、犯人を追うことができなくなる

（姉崎　石川勝利）

わけです。

入漁札を

（椎津新田　神山徳造）

私の家では亡くなった父が埼玉県から大正の末に引越して来たので、海苔の仲間には入っていませんでした。春の半ばになると、上げ潮にのって海苔が流れてくるのを拾いに行きました。潮に乗ってカレイがきます。夏になるとよく泳ぎに行き、一日中遊んでいると背中の皮がむけるほど焼けて、風呂に入るとしみて痛かったことを覚えています。

漁業組合ではアサリの入漁札を売り、それを持って背負いかごを持って行くと、上げ潮までにやっと背負って帰るほどアサリ、アカガイ、ニシなどがとれ、エラモクという巾の広い海草の中にイシガニが穴を作っています。ハゼ、アナゴ、ときにはウナギなどもいました。

漁師の人達はもっと沖へ出ると、シャコやボラなどもとれ、アサリ、ハゼなどの佃煮を作る町工場もありました。

私が中学時代、校舎の裏の木のすき間から潮の満ちてくるのが窓辺に見えた。放課後みよにつないである海苔とり船で、沖まで竹ひびで船を操っていった。

海の家が海岸沿いに五、六軒並んでいた。東京あたりからたくさんの潮干狩客が来て、海はたいそう賑わっていた。その頃秩父宮妃殿下もお見えになったことが、強く印象に残っている。

（八幡北町　高橋康子）

四月になると潮干狩が始まり、東京方面より小学生から大人まで、バスや汽車でおしかけた。駅から海が近いせいか、八幡は特に賑わったようです。

神社の鳥居をまっすぐ行ったあたりには海の家があり、そこで休んで簀立て遊びをした。貝は豊富にあり、大きなアサリがとれ放題でした。私達も小学生の頃は、よく親達と行ったものです。

（桜井知子）

沖に鳥居が

（八幡　染谷美佐子）

私が小学生の頃の八幡は、海と田んぼばかりでした。五月ごろになると、東京から観光バスに乗って潮干狩に来る人達でいっぱいでした。海の家が二軒あり、アサリ、ハマグリなどたくさんとれたものです。イソギンチャクに水をかけられたこともあったり、ウゴもよく取って売って小遣いにしたものでした。

船で沖に出ると、今の三井造船のあたりに鳥居があって、そこに井戸がありよく水を飲んだ。船の上でおにぎりやのり巻を食べた。

大きな船がアサリを買いに来ていて、冬には海苔を売って生活していました。船といっても小さなものは、大三商業の工場のある材木をつけてある場所にひもで縛っておいてあった。東京からお客さんが来た時は、大きな船で沖まで出て、船の上で天ぷらを揚げたりしてごちそうを食べたり海水浴を楽しんだものでした。今ではアサリ、海苔など買って食べているけれど、あの頃は想像もつかなかった。

（西川和子）

アサリを採りに何回か海に行ったことがありますが、引き潮ですっかり砂地になった海の上を歩いていて、魚のカレイを踏みつけて足の裏であばれられて、飛び上がって驚いた。またくさんなハマグリを堀りあてて、嬉しくなったこともありました。

その頃は全てが手仕事でしたので、目の廻るほど忙しいこともありました。

簀立ての中に入った魚を採るのもやりました。小さなウナギ、カレイ、タコ、イカ、時には名前の知らない魚も入っていました。海ヘビが入っていて、驚かされたことも。

海が本格的に埋立てられるわずか五、六年の事ですが、あの美しい海を埋立ててしまったことが惜しい気がして仕方ありません。

中学時代を回想する

（八幡石塚　大木映一）

昭和二十五年四月、八幡中に入学しました。当時の光景は神社脇の緑に囲まれた、というよりは、木や竹を切りとって校舎を建てた。林の中に校舎があり、教室のどの窓からも緑一色という感じでした。

校庭が無く、代わりに隣接の総合グラウンドを利用しておりました。（現在はサッカー場）唯一最大のグラウンドで、野球場二面と陸上競技場を有しており、小生も入部し八幡中野球部の一員としてこの広いグラウンドで暴れまわったものです。

野球場の一塁側は防潮堤となっており、上げ潮時のファウルや一塁手への悪投は海水の中へポトリ。また三塁側は通路をはさんで大きな池があり、ハスの花が咲きウナギに混じって大きなボラが泳ぎ、魚釣りを楽しむ人も多数おりました。大きなものですと六十センチ位のボラが釣れたようです。

この池が大変で、三塁側のファウルフライはこの池の中にジャボン。小生ども新入生部員は一塁側海辺係は水泳の準備、三塁側池係は釣り人がいる池の中にジャブジャブ入っていくわけにいかぬため長い竹竿を持って、それぞれボール拾い専門でした。

昭和二十六年頃より潮干狩客が増え、五月から八月にかけて多い時は観光バスが五十台という日もあり、野球場が駐車場と化した。その為、地中の排水ピットが重い車輌につぶされて水はけ不良になり、水が吹き出したりした。そうすると我々中学生がバケツで水をはきだし、スコップで穴を掘りおこして修復する、といったことが何度となく繰り返されました。

冬期には家庭科で海苔作りがあり、舟をこいでノリ網を張り、ノリの芽を育て、ノリ採集をした記憶があります。真冬の海水の冷たさ、海面を吹き抜ける寒風、同級生みんなと舟をこぎ、海底に泳ぐハゼを眺めながら食べた弁当のうまさ等々、なつかしく想い出されます。

潮干狩（しおひがり）りで賑わう

八幡海岸で潮干狩（昭和25年頃）。
遠浅なので潮干狩客で賑わう。遠方に飯香岡八幡宮の一の鳥居が見える。

春になると潮干狩のシーズンが始まる
潮の引いた干潟では
アサリ、ハマグリ、アオヤギ、アカガイ
などがいっぱい取れた
それを目当てに
東京からはもちろん
海のない埼玉県、栃木県、群馬県などから
観光バスで大勢おし寄せた
それは賑やかなものだった
五十年以上過ぎた今でも
その光景は忘れることができない

アサリ

潮干狩シーズン

（姉崎　相川庄亮）

三月も中旬を過ぎ、寒かった海苔とりの仕事が終る頃になると、いよいよ潮干狩のシーズンです。

この辺でよくとれた貝類の主なものは、アサリ、ハマグリ、バカ貝などです。子どもでも水遊びしながらとれる貝は、アサリ、カキ、ニシカンポ等です。魚も小さなハゼ、カレイ、アイナメ、カニ等が手でつかみとりできたものです。

家から海まで近かったので、休日には子ども達だけでよく海に行きました。そして他から来ている潮干狩の観光客の人達がびっくりするほど、貝やカニをおさえ、とくいになったこともありました。子どもでも近所に配るほど貝がとれたものです。

最盛期にはバスが何十台も、遠く埼玉、群馬、栃木県あたりからやって来ました。

面白かったカニとり

（八幡　永野達雄）

夏休みになると、小舟でよく、ウゴ、アサリ、ハマグリ、カニ、エビを取りに行く。子どもでも当時はたくさんとれました。その中で一番面白いものはカニとりです。海草の中に裸足で横に歩くのです。カニの甲羅の部分が、足の底に当るのです。まちがって手を入れると、はさまれて時には出血することもしばしばでした。

ハマグリをとって、東京から潮干狩に来た人達にさし上げたこともありました。大変に喜んでいただいたことが、子どもの頃の私達の自慢の一つでした。ウゴは家にもち帰り、乾燥させるとカンテンの原料になるので業者に売りに行きました。それが子どもの頃の私達の小遣いになりました。

もう一つつけ加えたいことは、海水が大変きれいだったことです。もう二度とあの素晴らしい海は、遠い過去の昔話になってしまいました。

い大きくなります。

アサリ取りがあきて水溜りに行くと、ハゼやカレイの子供が沢山いて手でつかんで遊びました。そのうち海水が岸へどんどんくるので帰らなければなりません。海はなつかしいです。市原の海岸は遠浅だったため、春になると潮干狩ができました。しかし毎日できるわけにはいかず、潮時があるわけです。その潮時とは、旧暦をみるとわかるようになっている。

ニシ貝はサザエに似ていて、とても面白い貝です。波が高いと砂の中にもぐってしまいます。静かな日になると砂の上に出て、タニシのように這って歩きます。おなかがすくと、アサリやハマグリをつかまえて窒息させて食べてしまいます。六月頃になると卵を生みます。なぎなたのような形をした一個の房の中に数千個の卵を生みます。その房を五百～千個ぐらい自分の貝に生みつけます。それを漁師が取ってきて、中の卵を出して赤や黄色に染めて、ナギナタホウズキとして売り出します。今でも、ほおずき市で売っています。

〈潮干狩のできる時間〉

旧暦	30日	1日	2日	3日
満月	15日	16日	17日	18日
時間	午前 9時～12時半	10時～13時	10時半～13時半	11時～14時半

市原市姉崎

（姉崎　榎本喜代美）

市原市姉崎は、昔姉ヶ崎村といって、東京には五大力という船で、米、薪、藁、果物などを運び、東京からは食糧などを運んできました。

昭和五年ころ東京の大森の人から、海苔の栽培法を教わり大きく変わりました。

そして東京方面から観光船が来るようになり、潮干狩が盛んになりました。汽車や観光バスで観光客が増えました。夏には簀立てで魚をとり、舟の上で食べたりしました。春から秋にかけては、アサリ、ハマグリ、アオヤギなどをとって生活していました。漁師の人は、エビ、シャコなどをとっていました。

べカ船

（八幡　白鳥忠雄）

埋立て前の八幡海岸は遠浅で、春は潮干狩、夏は海水浴ができたので、東京方面からもどんどん観光客がやってきました。私達も夏休みがくるのが待ちどおしかった。

べカ船（のりとり船）に乗り、満潮の時は自家製の帆を張って走ったり泳いだりしました。潮のない時は満ちてくるのが待ちどおしくて、舟をわずかな水の上（みよ伝い）を友達と沖の方へ押し出した。

その時分はプールが無かったから、海で泳いだり、舟で友達と競争したりして大自然の中で遊んだ。しかし波の静かな海は楽しかったけれど、風が出たり早手（雨）が来て波が荒れだすと恐ろしい海に変化します。自然の楽しさと恐ろしさを身をもって体験した。

あと忘れないことは、中学時代全校生徒が教材やクラブ活動の資金を稼いだこと。それは漁師たちが取り残したシオフキを皆で拾い集め、十八キロ（一斗）を五円で大船に売った。皆で協力しあってお金を得、貴重な体験をしたことがとても勉強になりました。

八幡神社

（八幡　地引久雄）

八幡神社の表鳥居のすぐ前まで海で、そこに納涼台という海の家がありました。春の潮干狩の季節には、遠く海無し県などから来る家族達で賑わいました。

海岸は松の立木があり、夏の暑い溶きには憩いの場所でした。

海では貝の他、カニや小魚、そして食糧になる海苔などもとれました。

今八幡様の境内に立って眺めたとき、その変り方の大きさに驚き、当時を思いながらこの文を綴りました。

海苔作り

夏の終わり海苔網の支柱立てに始まり
九月にはそこに網を張りこむ
十二月には採取が始まり
一月は最盛期で
朝四時頃から大忙し
家に帰ると乾燥が待っている
しかし収入も多かったので
家族みんなで協力して仕事ができた
自分で作った海苔の味は
四十年後の今でも忘れられない

海苔作りの一年

（八幡　青木隆）

一月　海苔の採取最盛期に入る。朝四時頃から始まり、七時頃までに千枚～二千枚簀付。
二月　八時頃から代簀に張り、午後三時頃終了。二人の手が必要。一人は浜へ行き生海苔を採取。
三月　海苔浜の後片付け。支柱や網の取込作業。
四月　浜の貝取りが始まる。アサリ、ハマグリ、アオヤギが多い。潮時の関係で月に十二日位。カニなども取れる。
五月　田んぼの仕事。昔は鍬でやったが、今は機械になった。
六月　田植え。終了まで約一か月かかる。
七月　海苔簀の簀あみをする。約千枚作る。魚はハゼが多く取れる。
八月　海苔網の支柱を立てる。
九月　海苔網を海中に張りこむのに忙しい。
十月　農家は稲の収穫で忙しい。
十一月　毎日のように浜に行き支柱や網の掃除。
十二月　海苔の採取時期に入る。収穫はまだ少し。

海苔の準備

（姉崎　安藤義雄）

夏が終わり稲刈りが始まる頃には、海苔の種付準備が始まります。これは三メートル位の竹を海に立て、この間に網を張り種付けをするわけです。十一月下旬になると胞子が成長し黒光りした浅草のりになる。身を切るような寒風をついて、長さ五メートル、巾一メートルの採取船に乗って、沖合約五００メートルにある魚場で採取し、天日乾燥して仲買人に出荷します。

海苔干し（昭和三十年代）姉崎にて。
天日乾燥をする、朝早く海苔を漉き干す。

一日に五万円も

（青柳　加藤一嘉）

早い年には十一月になると初のりが取れました。そして三月頃まで取れました。十二月から二月、一日の収穫がサラリーマンの一ヶ月分に相当するお金を得ることができたのです。一日に五万円もとれる日もありました。

昔の生のりが食べたい

（青柳　太田まつ）

きれいに洗った海苔は、紙を作るみたいに水で平にする。十八枚干せる大板干しにお日様をたよりに乾燥させる。ある日五千枚とれた時があった。急な大雨にやられて苦労も水のあわの日も。現在は乾燥機があるので、そんな苦労はしなくてすむ。

だから天候の悪い日は、からだのよく動く若い人が家に残る。何故って、雨が降りだしそうな時は、何千枚もの海苔を取り込むため、老人にはとても出来そうもないから。

時々生のりが食べたくて金田方面へ買いに行くが、昔の味はどこかへ行ってしまった。この手でもう一度黒々とした海苔を取ってみたい。足で魚をおさえてみたい。

そんな思い出が薄らいでいくのがさみしいと、祖母は腰を丸めて話してくれた。

海苔の時期は、農業との関係で非常につり合いがとれており、夏の頃より準備が始まる。まず海苔網を編みます。麻やシュロ糸で細ひもを針を使って編み上げます。両側に道網を付けますが、電柱などを利用し、麦わら帽子姿で一枚一枚仕上げます。

（八幡　白鳥敏夫）

海には海苔網を固定するのに竹棒を立てます。青竹を三メートル位の長さに切り、先を斜めに切り藁をくくりつけ抜けないようにする。親戚中の人が棒立て作業を行います。地面にポンプの水圧を利用して穴をあけ、棒を立てていきます。

九月頃、そこに網を張ります。三枚ずつくらい。遠浅なので、海面に浮いたり沈んだりします。自然にのりの芽がつき、三月頃まで続く。朝船に乗り海に出て、伸びたのりを手でむしって、ザルに入れます。行く時間帰る時間は、潮の関係によって違う。

取ってきたのりは、朝の三時ころから切る。それをのり簀にすきます。そして干場に一枚ずつ並べていきます。裏干しにしたのを昼頃表干しにし、三時頃のりをはがします。父はすき終わると海に出て行き、残った家族が仕上げを行う。私は中学二年生頃まで手伝いました。

家族みんなで

（椎津　安田吉男）

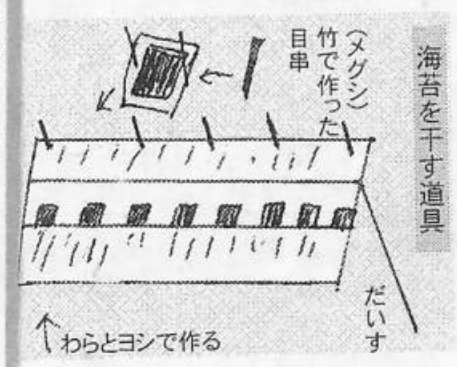
一年で最も忙しい季節は冬でした。それは海苔取りです。どこの家でも今よりずっと活気に満ちていました。子どもから年寄りまで誰でも手伝うことができました。

朝早く、それも一時二時には起きて海苔つけです。生海苔を一枚一枚ていねいにつけて二千枚～三千枚

もつけるのです。

午前七時頃までで切上げて、朝食をすませ、また海へ海苔取りに出かけなければなりません。家に残った人は、乾燥させ仕上げるのです。冬は毎日がそのくりかえしです。十一月の中頃から翌年の三月までの約五ケ月間続きます。とても忙しい思いもしますが、一年間の生活費は、昔は充分過ぎるくらいあり、楽な暮らしができました。

それが、海が埋立てられ、商人以外はサラリーマンになりました。永年海の仕事をしていて、勤めに出る事はとても苦労がありました。手に職もなく、時間にしばられるからです。もう一度昔の海がなつかしく思います。



のり取りは組合の合図のサイレンで、一斉にのり漁場に出動。自分の網のある場所でのりを手で摘みとる。作業終了時には、漁組の監視船が合図のサイレンを鳴らす。すぐ漁場から出て帰らなければならなかった。

（今津朝山　青木一男）

海苔の思い出

（八幡　西川はま）

五十年前はカシャクヌギの枝を使い、その後竹の方が丈夫ということで竹に変りました。海に立てる時期は、秋の彼岸のころでした。ヤシ糸を使って網を編み、モクセイの花が咲く頃に芽つけの網を張り、早い時は十一月の始めごろには新海苔がとれ始めました。

少し暖かい日が続くと、せっかく取れた海苔が真白に腐ってしまいます。こんなことがひと冬には必ず一度や二度はありました。海苔の取れない間はカアナソウ竹を海に立て、海苔を取ったものでした。それがだんだん改良されてヤシの網に変り、海苔が生活の重要な仕事の漁村となりました。どんなに寒くても天気さえ良ければ、年寄りも子どもも猫の手も借りたいほど忙しい仕事でした。

と言って、青海苔のようなものを切ってすいて売りました。

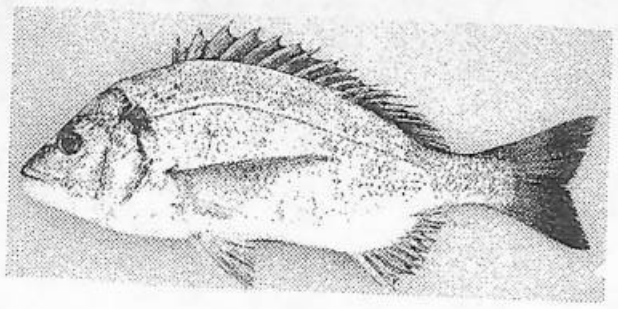
八幡浦は芽付けの漁場として、東京の大森や葛西方面から竹ひびがたくさんきました。網になってからも、船橋や幕張からもたくさんの人が頼みに来て、浜は活気に満ちふれていたことが今でも記憶に残っています。

（椎津　三沢いち）

私の覚えている椎津の海は、旧市原郡姉崎町椎津だった五十年くらい昔のこと。私が小学校二、三年生ごろに、海苔という仕事が当地に始められたように覚えています。それまでは夏は漁に出て、冬はまるっきり日なたぼっこというような半漁半農の村だった。冬は山へ行き、たき木などを取ってすごしていた。

それが昭和の初めに、今は亡き私の父などが漁組の役員をしていた。初めは少しばかり竹しびとしてモウ

クロダイ



帰りました。

（八幡　白鳥）

昭和十三年ごろでした。当時私は小学四年生でした。私のおじさんの家は、そのころ料理屋を営んでおりました。海岸より三百メートル位の所でした。

その頃の海は遠浅で、潮が引けるとし一キロぐらいは全く海水がなくなり、まるで砂漠のようでした。その頃おじさんの家では、簀立てという仕事をしていました。海の中に竹を藁で編んだ簀を海の中に立てて、潮の引ける時に魚がその中に入るようなしかけです。

一日に二回潮がひけるのです。特に大潮の時などは、魚が沢山とれました。日曜日の前の日などおじさんが

「しげお、今日は海に行かないか」

と言って、よく私をつれていってくれました。その時は

「もっと潮が干いてからとるから、つぼの中の魚を先に

の後についていきました。

海岸から七百メートル位の所にある簀立てに向って、砂の上を素足で歩く時の気持ちの良さは、それはそれは格別でした。至る所に海苔類、それに貝類がごろごろころがっており、注意して歩かないとよく足を切ったものです。

いよいよ簀立てに近くなると、海水がちょうど膝あたりまでの所にくると、おじさんが

「今日は潮どきがいいから、魚が沢山いるぞ」

と言いました。海には大変こわい魚がいるので、おじさんが先に歩き、「アカエイに気をつけろ」と言いました。このアカエイに刺されると、小さな子どもなどは死ぬくらいの恐ろしさをもった魚です。

簀立ての中に入って行くと、外側の簀の中に小さな魚が数えきれないほど泳ぎまわっています。アジ、サヨリ、コノシロ、ダツ、スミイカ、フッコウ、マルタ、トウなどがすいすい泳いでおりました。

私がたま網でその魚をとろうとすると、おじさんが

とろう」

と言いました。つぼの所に行き中をのぞくと、スズキ、カエズ、イナダ、カレイなどが沢山入っておりました。

おじさんが、簀の縄をほどき、

「しげお、その中に入って玉網ですくえ」

と言いました。何しろスズキなどは一メートル近くもあり、私には手のほどこしようがありませんでした。

おじさんは、ハハハと笑い、

「どれ、わしがとる」

と言って中の魚をすくいあげ、大ざるの中に入れました。

その頃から潮がだんだん少なくなり、魚の活動もにぶくなり手でもつかまえられるようになりました。多い時は小舟に一杯になるほど沢山とれました。簀のまわりには、ワタリガニ、エビ、コチ、カレイなどが沢山砂にもぐっていました。それを手でとる時の気持ちは本当に何とも言えませんでした。

いろんな魚が捕れた

（八幡　白鳥豊）

八幡の浜辺は昭和三十九年頃まで、今の八幡グラウンドになっている向う端から海でした。八幡宮社は、鎌倉八幡宮と向いあって建っているそうです。

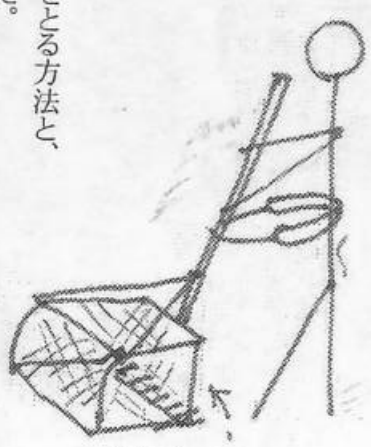
私が子どもの頃、両親は海に出て、冬は海苔とり、夏になれば簀立てをして暮らしを立てていた。そのため子どもであった我々は、いっしょに舟に乗って手伝いをしながら、すきを見て泳いだりしたものでした。

夏休みになると、東京などから来たお客さんを舟に乗せて簀立てまで連れて行き、中の魚を父が料理して食べさせていました。簀立てとは竹で編んだ枠を海の中に刺しておいて、満潮と同時に魚が流れ込み、引き潮になると簀立ての中に入った魚が逃げられないようになっている。

中にはアジ、ハゼ、エイ、カレイ、イシガニ、フグなどが沢山とれた。ほかにアサリ、ハマグリなどもとれ、お客さんを楽しませていた。

いろんな貝がとれた

潮干狩は観光客などの一種の遊びだが、漁業として仕事でとってもいた。
漁業権のある人が、腰巻ジョレンを使って貝をとる方法と、船にウインチをつけておこなう大巻とがあった。
アサリ、ハマグリだけでなく、オオノガイ、マテガイ、バカガイ（青柳）カキなども大量にとれた。
とった貝は潮干狩のお客に売ったり、市場に出荷したりした。



腰巻ジョレン

ジョレンを使って

（八幡　冷水たか）

祖母といっしょによくマテ貝をとりに行きました。三十センチ位の先の尖った鉄の棒をマテがもぐっている穴に突差す。それを引抜くと五センチ位のマテ貝がやりの先についてくるのです。うっかり力を抜いてしまうと、棒を穴にもっていかれるのです。私は何本も取られてしまい失敗ばかりでした。

母が朝食にフクベ（大きなざる）一ぱいの良くゆだったワタリガニ。このおいしい味は忘れることができません。これは父が夜にとってきたものです。

ワタリガニは腹を上に向けて泳いでいると聞きました。月夜にはとれないのでやみ夜にカーバイトを照らして、長い柄のついた大きなタマでとるのだそうです。

アサリ取りも生活の糧でした。ジョレンという鉄の歯が沢山ついた道具を腰につけて、上手な人は一日に一斗ます三十杯もとったそうです。これを買い船に売ってお金にするのです。天秤棒の前後にアジロザルを下げて家に持ち帰り、それをむいて売ることもしました。この方が高く売れたのです。

海の家にも東京方面から沢山潮干狩に来ました。横綱の吉葉山関が大きなパンツ姿で、ノッシノッシと歩いている姿が今でも頭に浮かびます。

海苔作り、アサリ取りなどは子どもの手助けを必要としたことを、今の人達にも知って欲しいと思います。

（椎津　三沢いち）

漁業組合が発展するにつれて、浦安方面からアサリ、ハマグリの種貝を買入れて、沖の砂田の良い所へ播く。大きくなった貝をコシタグという歯のついた籠で捕り、浦安の問屋さんに組合を通じて売り、お金を稼いだものでした。それが工業地帯になり、朝起きると工場の煙突を見ながら、近所の人々とお茶を飲みながら昔話をしている毎日です。

漁は潮風が吹き、空は青く空気はきれいでした。人々はどの顔も生き生きしていました。でも私が子どもの時は、今と違って遊び道具がないので物には恵まれなかった。

川でウナギを取って売りに行き、そのお金で米などを買っていた。川ではシジミ、海ではアサリをとった。それを待っていた船が買いにきていました。

そのころの海は祭りのようににぎやかでした。

（青柳　大村寿雄）

貝でもいろいろありました。アサリ、ハマグリ、アカガイ、ツブ、ヤエンボなどです。貝取りでも当たりはずれがあり、いい場所に行けば腕の悪い人でも取れます。海の仕事は短い時間で、上げ潮になれば終りになりますので、それまでに少しでも多く取るようにと頑張ります。

取れた貝類を小舟に積み、買出し舟に売りに行きます。多く取れたときは一斗ますに八十杯くらい。

歩いての貝取りもあります。笊（ざる）をかついで海に行き、潮のなくなるのを待ち、マンガで砂を掘って取ります。貝に砂が多く付いているので、水のある所で洗って笊に入れ替えます。それをかついで家へ帰ります。

（山王　石井猪三郎）

朝早く海苔舟で海に出て、一定の場所に着くと貝取りの準備に入ります。貝は手でも取れますが、ジョレンという道具で取りました。水がだんだん少なくなるのを待ち、腰くらいの深さになると海に入り、貝取りを始めます。

（八幡　白鳥忠雄）

中学時代、全校生徒が教材やクラブ活動の資金を集めるために潮干狩をした。漁師達が取り残したシオフキなどの貝を皆で集めた。十八キロ（一斗）を五円で大船に売った。皆で協力し合って体験し、良い勉強になりました。

（姉崎　菊地章江）

春になると近所の友達と貝とりに海へ行ったり、冬の間海に張ってあった海苔の網を陸に上げる。網に短く付いている海苔をとる手伝いなどをした。

今より暮らしは楽だった。それは秋から冬の間に一年分の収入を海苔でとっていたからです。

そのころ会社に勤める人達は、一か月一万円ぐらいだった。海苔をとりに行くと、一日に二万円も三万円もお金がはいった。

家族が食べる米は自分の家で作っていた。

東京湾でとれる魚貝類は、アサリ、ハマグリ、カキ、アカガイ、セイゴ、クルマエビ、カニなどです。

魚のとり方は、三目網カレイ網などを使った。イカの場合は、竹で作ったかごの中に餌を入れ、海の中に沈めてとった。

工場の建て方は、反対している人に金をあげ、賛成したと思わせて作った。

（椎津　橋本政一）

姉崎海岸や椎津海岸は遠浅で、富士山が見え全景が海でした。

エビ、イワシ、アナゴ、カニ、シャコ、コノシロ、セグロイワシ、スミイカ、ハマグリ、アサリ、バカガイ、その他いろんな魚が取れました。このうちエビ、アナゴ、スミイカなどは船で沖に出て、船を横に流して魚を取った。

コノシロ、セグロイワシなどは張り網で取り、大変な仕事でした。

春には沖の方まで潮が引いて、子ども達は貝などを取り、とても元気でした。

決っています。

長藻の生えている場所の端には潜んでいる大きな魚がおり、クロダイ、スズキなどもたまに出合います。

最後に夜の漁法を紹介します。姉崎から長浦、栖葉にかけて、夏から秋にカンテラと称してカーバイトガスを使って灯をともし、その灯を利用して夜の干潟の深さ五十センチ位の所で、たも又パッチンという網でクルマエビや海水にとり残された魚を捕える漁法。特にクルマエビは、灯を向けると目が赤く光るのですぐ居ることがわかる。収穫の多い時は一瞬に三～四キロも捕れた。

一メートルもの赤エイ

（姉崎　西賀勇）

子どもの頃はよく海で魚取りをした。舟に乗って、目ずきとヘシを持って魚を取った。目ずきとは、木で枠を作って下にガラスをはめこんだものです。その中から海中を覗くんです。ヘシとはもりのことです。

魚はカレイ、コチ、、アイナメ、ヒラメ、赤エイなどが取れました。カレイなどは砂の中にもぐっているので、ヘシで砂をかきまぜて出てきたところを、それっと突くのです。百発百中でした。

赤エイは大きいので一メートルもありました。そんな大きなエイを取る時は、ヘシを三、四本使って刺して取りました。

貝も沢山いました。特にニシカンポが多かったです。サザエによく似た、とてもおいしい貝です。それを取るには、竿の先におたまのような金網をつけて、ひっかけて取るのです。ニシカンポはかたまる習性があり、山のようになっています。そんな所を見つけたら、たちまちざるに一杯になってしまう。

取った貝や魚を仲買人に売って、小遣いなどにしました。

我々の子どもの頃は、こうしてスリルのある遊びができ、本当に楽しかった。おまけにお金の有難みも知りました。自分で作った金ですから、大事に使いました。

今の子どものように「お金ちょうだい」と言えばすぐにもらえる、それではお金の有難みなどわかるはずがありません。

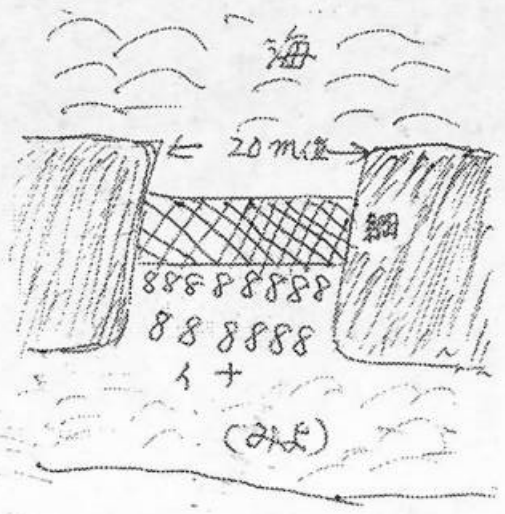
それに明けても暮れても勉強勉強と言われ、遊ぶ閑も友達づきあいもない。だから今の子達は、心の狭い人間になってしまいかわいそうでなりません。

みよでイナがとれた

（若宮　野本重幸）

昭和二十年、私は十二才でした。八幡町の各地にみよといって、港の小さいのがありました。

潮が上ってくると、イナ（ボラの子）が沢山みよに入ってきました。その数は数えきれないほどでした。引潮になる前にみよに網を張っておき、引潮と共に沖に出ていくのを待ちかまえてイカを取ったのです。何と一斗ざるに十杯くらい取れました。それを町内を歩きまわり、欲しい人にはただであげたものでした。



カレイやエビも

（白金　中村正行）

家から一五〇メートル位で海。海岸から眺める海のすばらしさは、今でもきのうの事の様に思い出されます。

比較的高級魚が水揚げされます。この他アサリ、ハマグリの採取もあります。これは八幡浦から稚貝を購入し、姉崎沖千メートルの養貝場に移し、一年～二年で成貝になったものを腰巻（人が海に入り人力で採取）大巻（船の上で三～四人が一組になってウインチで大型採取機を引く）で採る。つくだ煮の材料として大森、羽田方面に出荷された。

夏休みの時期になると、関東一円から小中学生が潮干狩におしよせる。潮のひいた姉崎の海は白一色に塗りつぶされたものでした。

流し網

（姉崎本町　鈴木貞吉）

この辺の海では流し網といって、夕方漁師達は舟で沖へ行き、クルマエビを専門に取ったものです。もちろん他の魚も取れます。カニや小魚なども取れます。

漁師達は朝方には帰り、クルマエビは仲買人が東京へ持って行き、カニや小魚類は近所で売って歩いたものです。

その他メゾキと言って、舟でカレイ、アイナメなどをモリで突いて取った。それからウナギ筒といって、もうそう竹を二尺位に切って節を抜き、網にゆわき長藻の中につるしておき、潮の引いた時カチでその筒を上げるとウナギが入っている。九月ごろになると一日で三キロくらい取れました。

一番思い出に残っているのは、スミイカを取りに行ったことです。仕掛はドウを海の中に入れておき、卵を生みにきたところをつかまえるのです。ドウというのは、針金又は竹材で扇形の小屋を作り、回りに網を張り入口を作ってあるものです。中には笹竹や草木を入れて、卵を生むのによくできています。入口は大きく、だんだん奥が小さくなっているので一度中に入ったら外に出られません。

朝早くから舟に乗って、沖へ沖へと走らせます。現地に着くと、卵となる浮きを見つけて一人が網を引き、もう一人が舟が流れないように、少しずつ櫓をこいで網を上げていき中の獲物を取り出します。

一番の楽しみは弁当を食べることです。海の上で食べる弁当の味は、格別おいしいです。

帰ってくる時は、舟に帆を張り風を一杯に受け、波しぶきをあげて海から川へ、川から家に今日の獲物を沢山持って。

八幡町の各町内にはミヨといって、現在の港の小さいのがありました。浜本町のミヨですが、潮が上ってくるとイナ（ボラの子）がたくさんミヨに入ってきました。その数は数えきれないほどでした。潮が満ちて引き潮になる前にミヨに網を張っておく。すると引き潮と共に沖に出て行くのを待ちかまえて、イナを取ったのです。なんと一斗ザルに十杯くらいは取れました。取ったイナは、

（若宮　野本重幸）

「イナはいにんかー」

と言って町内を歩きまわり、欲しい人にはただであげたものでした。

埋立前の八幡浦はアサリが湾内で一番多くとれた。種のアサリも生まれるしで、それをよその浦にも売ったりした。

五月になると学生達が八幡浦に潮干狩に来る。多くの人達が毎日のように来ていた。

とれた魚はカレイ、エビ、マイカ。そのうちでも今の子どもには見られない、イナという魚の子どもが、上げ潮になると数千匹も押し寄せてきた。

この話を教えてくれたおじいさんは、海若やアサリ

（八幡　鈴木茂雄）

を取るずっと前には、神力丸という船を持って、八幡から東京まで荷物を運搬していた。今で言う陸の運送トラックのようなお仕事をしていた。今では農業をしながら、趣味に盆栽や菊作りをして暮している。

賑わう海岸

（八幡　松本友蔵）

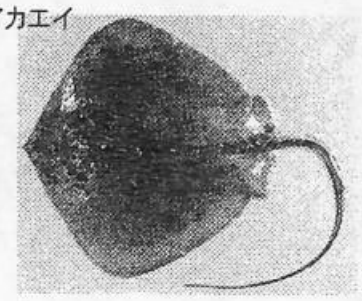
埋立てる前は潮干狩も盛んで、東京などから臨時列車が来たものだ。潮時の良い時は特に賑わった。学習院の皇族方が来られた時は、前をあげて海岸や道路を清掃した。

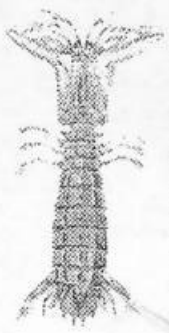
海岸には売店が建ち並び、八幡宮の境内は広くて良い憩いの場であった。夏になると波静かな海は、婦人や子どもの海水浴に適していたので、真夏のうちの二か月くらいは東京の人が避暑に家を借りて住んでいた。

海は簀立て、海水浴、潮干狩などで賑わった。一般の漁業者は取った貝などを満載した船で、買出しの船に売っていた。その買出し船は、浦安へ出帆した。八幡のアサリが水揚げされると、大量のため貝の値がさがった程だった。貝や魚は海へ行けば欲しいだけ取れた。

尚漁師はクルマエビ、カニ、シャコ、カレイ、イワシ、セイゴ、クロダイ、コハダ、アイナメ、その他生きた魚が豊富に取れた。今では活きのいいそんな魚は、もう見られない。

アカエイ





シャコ

千島列島～東シナ海。100m以浅の内湾の砂泥底にすむ。カマキリのような脚で小動物を打ち倒して食べる。エビやカニとちがって体が柔軟に曲がり、狭いトンネルの中でもUターンできる。

楽しかった海での遊び

楽しかった海での遊び

夏になると子ども達は
一日中海で遊んだ
貝や魚がいくらでもとれ
あきると海で泳いだりと
遊ぶネタには不自由しなかった
それに今と違って
「勉強しなさい」
とあまり言われなかった
埋立て前の市原では
子ども天国の時代だった

毎日が海野祭り

（小幡　石井春夫）

私の子供の頃、昭和二十五年当時今の総合グラウンドより西側は全部海でした。夏になると海の家が開き、遠くは埼玉県や茨城県より小中学生が、国鉄やバスを利用して、二千人ぐらいの人が海水浴に来た。毎日が海の祭りのようでした。

当時の遊びですが、夏はほとんど海でした。春から夏にかけての潮のない時は、海の中で野球やソフトボールなどをして遊んだ。今のように運動靴など履かず裸足（はだし）でした。ホームランなどを打った時など、海が広くてボールの当るところがないので、ボールを拾う人は大変でした。潮のある時は水泳や潮干狩など、毎日のようにして遊んだものです。

海と少年の日

（古市場　大塚良雄）

終戦直後に八幡宿に住み、お宮の参道を出た海岸で夏などは一日中遊び過ごした。食べるもの、着るものない頃だったが、苦もなく水に親しみ、あきれば土手の傾斜の焼けた石に大の字になり、身体の裏表を乾すのだが、皆まったくのフルチンであり、思い出すにつけほほえんでしまう。舟に乗って沖の藻（も）の中に竹筒を仕込んでのうなぎ採りにも行った。

昭和二十二年浜野へ移り、現在の千葉火力発電所になっている所へ父とオオノ貝を採りに行った。砂の中にある貝を見つけ、スコップで二、三十センチ掘ると、十五センチもあるものがとれる。時にはマテ貝もあり、母がむいて干したものを香ばしく焼いて食べさせてくれたものだ。

月の沙漠ではないが、釣竿（つりざお）をかついで広い砂浜を先端まで歩き、ハゼやセイゴを釣った所が、現在の川崎製鉄の工場群である。

笹立てに甲羅が一メートルもあろう海亀が魚を追って迷いこみ、捕ったことがある。町の古老が亀の口をむりやりあけて、湯呑の酒を放りこむ。そのようにして海へ帰すことが慣習だったようだ。潮が満ちてきて亀の背にまたがり蛇のような首の皮をつかんでひっぱると、びっくりしてか亀が一かき二かきと泳ぐ。まさに浦島太郎よろしきありさまで、思い出の極みでもある。

夏は一日海で

（松ケ島　國吉広司）

海、海、海、遠浅できれいな海でした。春は特にきれいです。学校から帰ると竹をかついで歩いて海へ行く。ミミズを餌にして、ハゼやフナを釣ったり、アサリやハマグリをとったりして夕暮まで遊びました。

夏になれば海水パンツにタオルを持って、畑でトマトをとり道々食べながら海へ行く。海へつけば持っていたトマトを海へ投げこみ泳ぎながらそれを拾って食べたりした。海岸で甲羅干しをしたりカニをとったりした。

満潮になれば沖のダンギワ（急に深くなる所）まで三キロ位遠泳したりしました。海の中で目をあければ、貝や海藻などがきれいに見えます。

そうやって一日中海で遊んですごした。家に帰ってからは、村にまわってくる紙芝居をアメをなめながら見るのが楽しみでした。

夕方まで海で遊び

（島野　庄司晶子）

私達の小学生時代は、それはそれは大変楽しい時代でした。春は遠くまで潮が引き、学校から帰ると早々に、ザルやマンガを手に裏の海におりて行き、砂浜でアサリ、ハマグリ、アオヤギなどの貝を取って遊びました。

潮の引いた水溜りには、カニ、ヤドカリ、小魚などが沢山おり、手で取ったりザルですくう。そうやって

夕方まで海で遊び、友達と夕日を背に歌をうたいながら帰った。今でも、それが夢のように思い浮かんできます。

（八幡　田中博）

私達の中学は八幡神社のそばにあり、百米先が海だった。今の運動公園の所がハス田になっており、いつでも海が見え行くことができました。松林の先の海の中に鳥居があり、根元が海につかるので貝が付着していました。

夏になると水泳教室を開きますが、学校で指導される前にガキ大将にしごかれ、誰でも泳げるようになっていました。

舟遊びもしましたが、沖に富士山が見える日は要注意です。きまって強い西風が吹き出すからです。

まだ小さかった小学生の頃の夏休みが楽しかった。友達五、六人で舟に乗って海に出て行きます。錨をおろして舟をとめ、泳ぎ遊び、貝をとってしょう油をつけてそのまま食べ、魚をとっては焼いて食べました。

夜になったら、友達みんなで舟の中に寝る。二、三日したら家に帰る。本当にのんびりとした子ども時代でした。

（青柳　根本留雄）

海は一年中飽きることなく真黒になって遊べる楽しい遊び場でした。今の子ども達は遊び場がなくてかわいそうだ。今になって考えると、海を埋立てたことは残念でならない。今度はぜひ遊園地をたくさん作ってやってくださるよう、お願い申し上げます。

（椎津　安田忠造）

上げ潮の時に友達と泳いだりしました。今のように水着がなかったので、下着で泳ぎました。小学生の頃は一年に一回、海の清掃をしたり、学校全体で二、三回泳ぎに行きました。その頃は港町の海岸で泳いだので、のり取りの舟がたくさん並んでいました。網がかけてあり、とても情緒がありました。

（姉崎　斉藤）

懐かしい海

（八幡　国吉）

春になるとアサリ、ハマグリ、バカガイなどを取りに海へ行った。マンガという物で砂をガリガリ掘ると、大きなアサリやハマグリがいっぱい取れた。当時はアサリを買う船が出ていて、一斗五十円とか七十円で買ってくれた。だから小遣いかせぎに、よく海へ行きました。

夏は家から水着を着て、田んぼ道をはだしで海へ泳ぎに行きました。体育の時間の水泳訓練も今のようにプールではなく、広々としてた海での訓練です。納会は海に竹杭を打ち、縄を張ってその中でもぐっての宝探しでした。

そんな昔の八幡町が本当に懐かしい。どこに行っても自然がいっぱい。今私の子ども達にも、昔のような日々を過ごさせてやりたいとつくづく思います。

（姉崎　斉藤実）

箱形の下にガラスで水が入らないようにしためがね。メヅキで海の底を見るのです。腰まで海水につかって、海に生えているモクのたくさんある所まで行くと、カレイとかアイナメがたく

さんいる。それをヘシで突いて捕る。毎日のように遊びに行って魚を突いて捕ったことは、今でも楽しかった思い出に残っています。そういう生活が二十才頃まで続いた。少年時代に東京湾の海で過ごした当時が、今でも懐かしく思う一人です。

海は遊び場

（姉崎　山下里江子）

私達が子どもの頃は海が遊び場だった。春になると東京方面から潮干狩に来る人達で、海は人の頭でいっぱいでした。桜の花が咲くと、その下は潮干狩に来る人の車がびっしり。

少し歩くと砂浜が見え、大きな松の木が何本もあり、ブランコをしたり砂遊びをしたことを思い出します。

冬になると、どの家も海苔を作り、私達子どもはみんな、それを手伝ったものです。お父さんお母さん達は朝暗いうちに起きて、まず海苔を細かく切り、水に浮かべる。それを海苔の簀の枠に流し水切りをする。

私達が起きる頃にはいっぱいできていた。学校から帰ると、またそれを手伝った。

今でもおばあさんが話してくれます。

「海があったころは、町まで行かずに食事の仕度ができたものだ…」と。

（姉崎　斉藤和子）

春の陽をいっぱいあびながら、水ぬるむ姉崎海岸でアサリ採りをしました。遠くまで干潟のできた海で、しょいかごいっぱいになるのにたいした時間もいりませんでした。

コヤシガニと言っていましたが、チューインガムに足

をつけたような蟹が、干潟の穴のあちこちに遊んでいました。

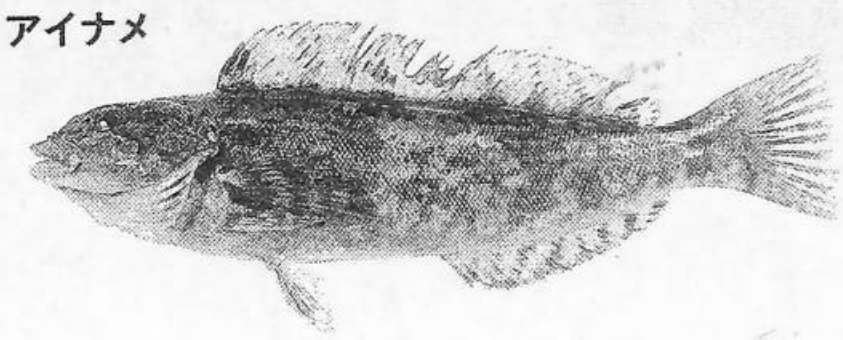
漁師の舟も錨をおろして、いっぱい岸にありました。静かでのどかな風景を思い浮かべます。今は出光の会社の真中あたりの所で、アサリなどとっていました。

（古市場　大塚良雄）

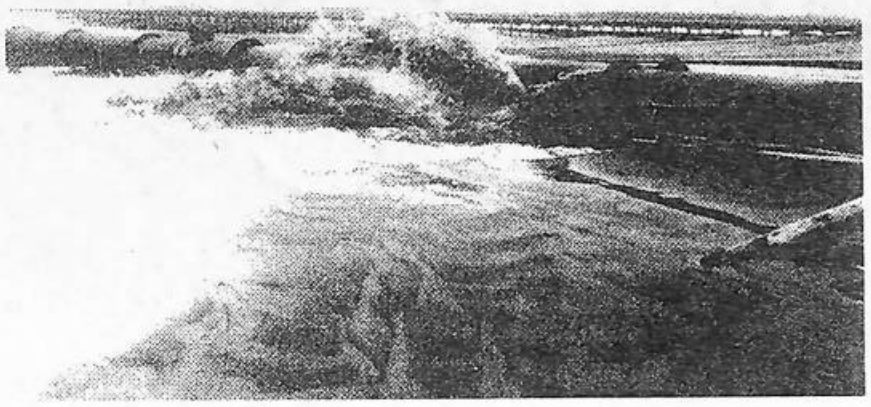
沖合にはバカガイがいくらでもあり、足でグリグリ砂の中を探し、足に当ると潜って取る。時にはカニや魚を踏むこともある。

遊んでいる間飲み物などはまったくない。上げ潮に送られて戻る途中、岸から一キロメートルほどに水がボコボコ湧いている井戸があり、一メートルも潜って口を近づけて飲んだ。その水のうまさは、暑い日のビールにも勝るとも劣らなかった。

アイナメ



埋立てられていく海



埋立て工事始動（昭和36年）。
五井浦から姉崎浦の各所に、沖から陸地に向かって太いパイプが延々と伸びている。工場建設予定地に沖合から埋立て用の砂を送るパイプが陸地に向かって施設されている。

埋立てられていく海

それは昭和三十五年に始まった
子どもにとっては遊びの場
おとなにとっては仕事の場でもある海が
どんどん消えて
工場地帯が造成されていく
補償金に口止めされ
文句を言うこともできない

海水で塩を

（姉崎　刈米弘）

多くの家がブリキで作った鍋に海水を入れ、豊富だった薪を燃やし、蒸発によって海水中の塩をとり生計を助けた。一部には塩田を作り、効率の良い製塩をしている所もあった。

数限りない思い出のある昨今だが、現在の工業地帯を見て誰が昔の白砂青松の景色を想像することができるだろうか。

開発に思う

（姉崎　安藤竹造）

開発は商工業を発展させ、県の財政を豊かにした。公共施設等の整備、社会保障などの改善ができた半面、千葉、市原地区に見られるような公害を発生し付近住民の健康を害した。更に房総半島の命ともいうべき素晴らしい海岸線をほとんど埋め尽し、潮干狩、海水浴といった観光の場まで奪いとってしまった。県内をはじめ東京や各県からおし寄せる海水浴、潮干狩客は年間のべ三百万とも四百万ともいわれているのに。

自然は年々減る一方、特に姉崎周辺は工場群がたち並び、十数年前の面影はなく、これが海であったかと思う程です。

また姉崎地区から東京湾上を望むと、富士山がくっきり浮かび、その下を帆かけ船がさざ波に揺れる。干潟には数多くの野鳥が飛びかう。夕暮れ時には太陽の光に海水が金色に輝く様はもう見られない。

（飯沼　国吉昭二）

昭和三十五年ごろ五井の海の埋立てが始まった。一番先に旭ガラス五井工場が建設され、その後、千種浦が次々と埋立てられていった。今では木更津方面まで工場が沢山建設され、京葉工業地帯ができあがりました。

（青柳　加藤吉啓）

昭和三十七年、漁業権放棄し埋立てが始まる。漁民が浜に上ったカッパとなった。企業で働くことの必要な学歴や技術のない元漁民、会社での精神的苦労は大変なものです。幸い企業は元漁民を温かく迎えてくれた。

海への別れ

（今津朝山　舘石晴旦）

入梅も過ぎ夏がやってきた。学校の休みとなった子ども達は、毎日のように海へ遊びに行った。水はどこまでも青く、入道雲は銀色に輝き、夏の日の太陽に映る富士の山も青く、西の空にそびえたっていた。

子ども達が海とたわむれる頃、大人達は来る冬の日の海苔取りの準備に毎日を送る者、夜の海へ沖流し漁に行き、エビを取る者等、思い思いに海へ出かけて行った。

やがて夏も去り、子ども達は帰っていった。海はまた大人達のものとなる季節が来た。海苔取りの準備に毎日海に行き、海と語らい、海と戯い、そして海を友とした。

私達の苦しみ、楽しみも、あの海は知っていた。私達の知らない昔日の事も、あの海は知っていた。が、ある日私達は、その海と永遠のさよならを告げあった。あの真白な富士の山も、あの青海原も、今は遠い昔の思い出となってしまった。

海に浮かぶ富士

（古市場　大塚良雄）

夏の風物、両国や千葉出州海岸の花火の夜、近所の子ども等と連れだって海岸へ出かけた。しかけ花火は空が明るくなるだけだったが、打上げはよく見えた。花火とはそうやって見るものだと思いこんでいた。

五年前に病の父が他界する直前、海を見せるため千葉港の先端へ連れて行った。車中からじっと見つめていたが、この変わりすぎた袖ケ浦を見て慰めになったかどうかはわからない。

埋立てられる前の透明な空気で見た夏の炎のような落日。冬の海に浮かぶ真白き富士。黒々と連なる箱根、丹沢の山塊。そして東京の背後に秩父が見えた。沖合から見返せば房州の山々、裏にかろうじて太平洋を秘める台地は低く長く筑波に及ぶ。その景観は海であったればこその感である。三人の息子達にも話して聞かせはするが、触れさせることは望むべくもない。

（有秋台東　廣部康昭）

昭和三十年頃には、海のない埼玉県の小学校と、山のない姉崎小学校で交換会をやり、埼玉の小学生に椎津や姉崎の海で楽しんでもらったこともありました。それが今では姉崎小学校の生徒が岩井海岸に臨海学校として行くようになってしまいました。

（姉崎　渡辺晃子）

海が埋立てられる前は、半農半漁の家が多かった。海を取られ農業だけで生活できなくなり、勤めに出るか店を始めるかしなければならなくなった。

私の家では店を始めたけれど、お客様に対して「いらっしゃいませ」がなかなか言えなくて困った。十年間苦労して、やっと一人前の店になりました。

（今津　岡田美栄子）

海が埋められ、職もない今の四十才位の方は、訓練校に行って身につけた職についたものです。本当に生活も変る。サラリーマンの生活に慣れないため苦労しました。

海が埋立てられて一番苦労したことは、自由なことができなくなったことと、一日の時間が永く感じたことです。

（八幡　植草正夫）

海の思い出

（白塚　中村満之）

私の海の想い出は、少年時代の想い出と重なります。遊ぶ場所はあっても遊び道具の少なかった時でしたので、水に親しむ時期になると川へ行ったり海へ行ったり。その中でも住む所から近い今津の浦へ潮干狩。夏は潮干狩とカニ採りを兼ねた海水浴。現在の出光興産の工場の真下が私がよくでかけた場所です。

家から直線にして千五百米ぐらいですが、友達五、六人で田んぼのあぜ道をポプラの木をめざして歩いた記憶は今も残っています。私が住む地区は昔から漁業権はありませんので、海苔や貝類を採って生計を立てるという人はいませんでしたが、アサリ、ハマグリ、カニなどは自由に取ることができました。もちきれないほどとって、荷車やリヤカーなどで運んでいた人もありました。

埋立てを始める当時先見の明のある人がいて海遊びのできる場所を残したとしても、貝類などは取って食べることはできないと思う。工場から排出される汚物、汚水、かつて川崎と市原との間にフェリーが往来していた時、船から見たあの水の色はその汚水のたまり場になってしまっていたわけです。自然を保護するのも破壊するのも人間そのものであることをしみじみ感じた次第です。工場ができそこに勤務する人が増え、確かに昔と比べたら生活は大変豊かになりました。しかその代償が大金をとられる潮干狩であり、遠くて不便になった海水浴場でありプールであると思っています。

開発に思う

（姉崎　安藤竹造）

成田国際空港、京葉工業地帯と発展を続ける千葉県は、商工業の発達と共に全国でも有数な工業県となった。このため農業、漁業県だった十数年前に比べ地価は数倍高騰し、土地売却による億万長者は年々増加の一途をたどる。事実県内開発は県民をはじめ首都圏民にも多くの福音をもたらしたが、我々千葉県民は双手をあげて本当に喜べるだろうか。県内の乱開発がこのまま進むのを黙って見過ごしてよいものかどうか、もう一度考えてみる必要はないだろうか。

開発は商工業を発展させ、このため県の財政を豊かにし、公共施設等の整備、社会保障等の改善などができた反面、千葉、市原地区に見られるような公害を発生し、付近住民の健康を害している。そればかりか、房総半島の命ともいうべき素晴しい海岸線をほとんど埋め尽くし、潮干狩、海水浴などの観光産業の場まで奪いとってしまった。これまでの観光客は、年間三百万人ともいわれているのに。

自然は年々減る一方、特に私の住む姉崎の周辺は工場が立ち並び、十数年前の面影がすっかりなくなり、「ここに海があった」ことが想像もできないほど変わってしまった。

埋立てる前は、湾内を望むと富士山がくっきりと浮かび、その下を帆かけ船がさざ波にゆれ、干潟には多くの野鳥が飛びかい、夕暮れ時には太陽の光に海水面が金色に輝く様はもう見られなくなった。

そして開発は海ばかりでなく、緑豊かな千葉県からどんどん緑を奪い、鉄とコンクリートに固め変えている。ゴルフ場、大型工業団地、高層住宅団地などの建設は急ピッチで進み、これらに移住する新千葉県民は年々増加しつつあり、県民性も大きく変わるのではと思う。

現在姉崎地区から牛込海岸へ潮干狩に行くには車でも三十分もかかり、入場料まで払わねばならない。大変な変わりようである。

（青柳　加藤吉啓）

昭和三十七年、漁業権放棄し埋立てが始まる。漁民が浜に上ったカッパとなった。企業で働くことの必要な学歴や技術のない元漁民、会社での精神的苦労は大変なものです。幸い企業は元漁民を温かく迎えてくれた。

海への別れ

（今津朝山　舘石晴旦）

入梅も過ぎ夏がやってきた。学校の休みとなった子ども達は、毎日のように海へ遊びに行った。水はどこまでも青く、入道雲は銀色に輝き、夏の日の太陽に映る富士の山も青く、西の空にそびえたっていた。

子ども達が海とたわむれる頃、大人達は来る冬の日の海苔取りの準備に毎日を送る者、夜の海へ沖流し漁に行き、エビを取る者等、思い思いに海へ出かけて行った。

やがて夏も去り、子ども達は帰っていった。海はまた大人達のものとなる季節が来た。海苔取りの準備に毎日海に行き、海と語らい、海と戦い、そして海を友とした。

私達の苦しみ、楽しみも、あの海は知っていた。私達の知らない昔日の事も、あの海は知っていた。が、ある日私達は、その海と永遠のさよならを告げあった。あの真白な富士の山も、あの青海原も、今は遠い昔の思い出となってしまった。

海に浮かぶ富士

（古市場　大塚良雄）

夏の風物、両国や千葉出州海岸の花火の夜、近所の子ども等と連れだって海岸へ出かけた。しかけ花火は空が明るくなるだけだったが、打上げはよく見えた。花火とはそうやって見るものだと思いこんでいた。

五年前に病の父が他界する直前、海を見せるため千葉港の先端へ連れて行った。車中からじっと見つめていたが、この変わりすぎた袖ヶ浦を見て慰めになったかどうかはわからない。

埋立てられる前の透明な空気で見た夏の炎のような落日。冬の海に浮かぶ真白き富士。黒々と連なる箱根、丹沢の山塊。そして東京の背後に秩父が見えた。沖合から見返せば房州の山々、裏にかろうじて太平洋を秘める台地は低く長く筑波に及ぶ。その景観は海であったればこその感である。三人の息子達にも話して聞かせはするが、触れさせることは望むべくもない。

（有秋台東　廣部康昭）

昭和三十年頃には、海のない埼玉県の小学校と、山のない姉崎小学校で交換会をやり、埼玉の小学生に椎津や姉崎の海で楽しんでもらったこともありました。それが今では姉崎小学校の生徒が岩井海岸に臨海学校として行くようになってしまいました。

（姉崎　渡辺晃子）

海が埋立てられる前は、半農半漁の家が多かった。海を取られ農業だけで生活できなくなり、勤めに出るか店を始めるかしなければならなくなった。

私の家では店を始めたけれど、お客様に対して「いらっしゃいませ」がなかなか言えなくて困った。十年間苦労して、やっと一人前の店になりました。

（今津　岡田美栄子）

海が埋められ、職もない今の四十才位の方は、訓練校に行って身につけた職についたものです。本当に生活も変る。サラリーマンの生活に慣れないため苦労しました。

海が埋立てられて一番苦労したことは、自由なことができなくなったことと、一日の時間が永く感じたことです。

（八幡　植草正夫）

海の思い出

（白塚　中村満之）

私の海の想い出は、少年時代の想い出と重なります。遊ぶ場所はあっても遊び道具の少なかった時でしたので、水に親しむ時期になると川へ行ったり海へ行ったり。その中でも住む所から近い今津の浦へ潮干狩。夏は潮干狩とカニ採りを兼ねた海水浴。現在の出光興産の工場の真下が私がよくでかけた場所です。

家から直線にして千五百米ぐらいですが、友達五、六人で田んぼのあぜ道をポプラの木をめざして歩いた記憶は今も残っています。私が住む地区は昔から漁業権はありませんので、海苔や貝類を採って生計を立てるという人はいませんでしたが、アサリ、ハマグリ、カニなどは自由に取ることができました。もちきれないほどとって、荷車やリヤカーなどで運んでいた人もありました。

埋立てを始める当時先見の明のある人がいて海遊びのできる場所を残したとしても、貝類などは取って食べることはできないと思う。工場から排出される汚物、汚水、かつて川崎と市原との間にフェリーが往来していた時、船から見たあの水の色はその汚水のたまり場になってしまっていたわけです。自然を保護するのも破壊するのも人間そのものであることをしみじみ感じた次第です。工場ができそこに勤務する人が増え、確かに昔と比べたら生活は大変豊かになりました。しかその代償が大金をとられる潮干狩であり、遠くて不便になった海水浴場でありプールであると思っています。

開発に思う

（姉崎　安藤竹造）

成田国際空港、京葉工業地帯と発展を続ける千葉県は、商工業の発達と共に全国でも有数な工業県となった。このため農業、漁業県だった十数年前に比べ地価は数倍高騰し、土地売却による億万長者は年々増加の一途をたどる。事実県内開発は県民をはじめ首都圏民にも多くの福音をもたらしたが、我々千葉県民は双手をあげて本当に喜べるだろうか。県内の乱開発がこのまま進むのを黙って見過ごしてよいものかどうか、もう一度考えてみる必要はないだろうか。

開発は商工業を発展させ、このため県の財政を豊かにし、公共施設等の整備、社会保障等の改善などができた反面、千葉、市原地区に見られるような公害を発生し、付近住民の健康を害している。そればかりか、房総半島の命ともいうべき素晴しい海岸線をほとんど埋め尽くし、潮干狩、海水浴などの観光産業の場まで奪いとってしまった。これまでの観光客は、年間三百万人ともいわれているのに。

自然は年々減る一方、特に私の住む姉崎の周辺は工場が立ち並び、十数年前の面影がすっかりなくなり、「ここに海があった」ことが想像もできないほど変わってしまった。

埋立てる前は、湾内を望むと富士山がくっきりと浮かび、その下を帆かけ船がさざ波にゆれ、干潟には多くの野鳥が飛びかい、夕暮れ時には太陽の光に海水面が金色に輝く様はもう見られなくなった。

そして開発は海ばかりでなく、緑豊かな千葉県からどんどん緑を奪い、鉄とコンクリートに固め変えている。ゴルフ場、大型工業団地、高層住宅団地などの建設は急ピッチで進み、これらに移住する新千葉県民は年々増加しつつあり、県民性も大きく変わるのではと思う。

現在姉崎地区から牛込海岸へ潮干狩に行くには車でも三十分もかかり、入場料まで払わねばならない。大変な変わりようである。

海の記録を

安原修次

今から十数年前まで、ここ市原の海は遠浅な静かな所でした。のり、貝などが取れ、夏には海水浴でにぎわった。

その海が埋立てられ、京葉工業地帯が造成されると、地域は一変してしまった。漁業で暮らしを立てていた人々は、仕事を変えなければならなくなり、その苦労も大きかったと思う。

ところで、わずか数十年前と大きくうつり変わった郷土のことを記録に残し、海のことを知らない今の子ども達に伝えることが大事なことと思います。そして社会科学習の資料にも利用したい。そんなことも考えています。

そこで次のようなことについて、知っている人、今でも海のことについて思い出のある人は、この用紙に書いて、学校に出してくださいますようお願い致します。

・春になって海で潮干狩をしたり魚とりなどして遊んだことがありますか。できるだけ詳しく具体的に。

・夏になって海で泳いだり、水遊びをして遊んだこと。

・海苔をとったり、貝とりをして生活していた人は、その頃を思い出して書いてください。

・この辺の市原の海は、どんな魚がとれたのでしょうか。魚のとり方などについても知っている人は教えてください。

・海が埋立てられ、職も変えなければならなかった人、いろいろとご苦労もあったことと思います。その苦労したことなど。

その他ここ市原の海についてでしたら、どんなことでも結構です。どうかひとりでも多くの方のご協力をお願いします。

なお文章を書くのが苦手だとか、話さないとよく通じないという方はそのこともお書きください。又この人なら知っているという人の名前を。

昭和五十三年二月十八日

（船橋市丸山小学校教諭）

私自身は海なし県の群馬県生まれなので、海のことはほとんどわからない。海を初めて見たのは中学校での修学旅行の神奈川県の江の島だった。この記録をまとめることを通して、私自身とても勉強になった。

尚ここにのせた写真については、「市原市の百年」（長野県松本市にある郷土出版社）の本からお借りした。

最後に記録を書いてくださった皆さんには、三十年以上もそのままにしておいた御無礼を深くお詫びします。

参考文献

・市原市の百年　郷土出版社

・まるごと海の生きもの　木村義志監修　学研もちあるき図鑑

・東京湾の魚類　河野　博監修　平民社

あとがき

安原修次

四十年前、習志野市鷺沼小学校の教員をしていた時「うつりかわる鷺沼」という記録集を出した。謄写刷りで冊数は少なかったが、図書館で読んだと未だに反応がある。

千葉県の内湾は東京から近いので、春は潮干狩などで賑わった。東京の小中学生達が観光バスで大勢おし寄せた。

それが昭和三十年代になったら、あっという間に埋立てられ地域の様子が急激に変わった。何とかこれを記録に残しておかねばと、鷺沼に続き市原の記録もと思った。

三十七年前に市原市立八幡中学校、千種小学校、石塚小学校、姉崎小学校の四校に協力してもらい、父母に海の記録を書いてもらった。それを今まで自宅に保管しておいた。私はその後教員を退職、花のカメラマンになったが、八十才になったので何とか冊子にまとめることにした。この記録を書いてくださった方も、すでに亡くなった方が多いのではと申し訳なく思っている。

先日市原中央図書館に行ったが、この本のように住民の声をそのまま本にしたのは無かった。埋立てする前の市原海岸では、人々が海とどんなつながりがあったかを、直接書いてもらったので、今となってはとても貴重な記録である。